

コラム
子育て応援歌



気がかりな 子どもたちの野球離れ

三 浦 捷 也

(三浦歯科医院 院長)

野球人口減少の一途をたどるなか、日本の野球界の変革を目的に、プロ野球や学生野球から少年野球までの指導者、整形外科医、プロ野球OB、マスメディア関係者などが参加して、2018年4月に「カンビオ（スペイン語で変化の意味）ベースボールミーティング」が開催された。ミーティングの先頭に立ったのは、横浜DeNAベイスターズの選手で、現在は大リーグで活躍している筒香嘉智選手だ。

筒香選手は「勝つことが優先され、子どもの将来がつぶれてしまっている」。野球人口の減少は野球界全体の問題だが、特にジュニア世代の指導について「変化することが大事である」とスポーツ界の指導者の意識改革を訴えた。筒香選手はドミニカなどウィンターリーグにも積極的に参加し、中南米野球を体験している。海外との野球文化を通じて感じた「指導の違い」に対するメッセージには、プロ・アマ関係なく耳を傾けるべきではないだろうか。

同じような時期に国連児童基金（ユニセフ）が「子どもの権利と、スポーツの原則」を発表し、「暴力や過度な練習の禁止」とともに、「勝利至上主義に留意する」指針をまとめた。野球界だけではなく、子どものスポーツ全体の立場からも、勝利至上主義脱却の動きが広がりつつある。

秋田県では、高校野球は多くの県民にとっての関心事であるが、その一方で高校野球の基礎

となる小中学校球児の減少が関係者の間で新たな問題となっている。その背景には、少子化や競技種目・生活様式の多様化など、社会の構造変化によるところが大きい。そればかりではなく、「野球嫌い」による「野球離れ」も要因の一つと考えられる。生まれてわずか10年足らずの年端も行かない野球少年が、ひじの痛みを訴え通院する。野球が大好きだったが、野球を体験したが故に野球嫌いになり、スポーツそのものから遠のく子どもにもしばしば出会う。

甲子園で勝つことを金科玉条として、県教委が目指している「小中高連携した秋田型育成強化」の方針が、小中学校野球活動究極の目的は「甲子園球児育成のため」を広く県民に印象づけ、「甲子園ありき」「勝つこと」が最優先の社会風潮を増長させた。こうした野球環境にともない、県内の小中学生の野球指導は、殊のほか技術を身につけること、競技力向上に特化する傾向が強く「鍛え、競い、勝つ」体制が鮮明となり、年々低年齢化している。

県内各地区でも「甲子園球児育成」を前提に掲げた「中学生の硬式野球チーム」が誕生している。更に、野球部を退いた中学3年生を対象にした硬式野球指導の動きが活発になっている。小中学生の野球は、年々「高校野球強化対策の一環」「野球能力の選別化」が加速され、かつて遊びの王道だった野球から子どもたちが離れ

ている。すでに小学生の低学年の頃から野球に親しむチャンスがあるのは、選ばれた能力を持つ子どもだけというのが現実になっている。

「勝利」「甲子園」は二の次ということではないが、成長過程にある小中学生の野球は、球児に野球を通して何を伝え、何を学ばせるかが大切であろう。同時に、子どもたちの両親も指導者も、同じ価値観、倫理観、スポーツ観を持たなければ指導は台無しになる。高校球児OBの方々の後輩を思う気持ちは理解できるが、私は元高校球児であっても、双手を挙げて賛成はできない。中学校球児は、ひととき「野球」から離れ、新しい「高校生活、高校野球」を夢みて勉学に集中する期間が必要なのではないだろうか。その苦勞と努力が「甲子園」を目指す原動力にもなる。元高校球児から後輩諸君へのささやかなアドバイスである。

秋田県では、スポーツを通じて、すべての県民の幸福を目指して「スポーツ立県あきた」を宣言した。人間性が育つ基礎になる小中学生時代に、スポーツ嫌いや歪んだスポーツ観が培われたのでは、秋田県のスポーツの発展は期待できない。高校野球の歴史は100年を超えたが、このままでは「教育の一環」「部活」である高校野球の行く末が案じられる。

－野球を心から楽しむ、運営・指導に

ならないだろうか－

私が小中学生（特に小学生）の野球を率いる熱心な関係者の皆さんにお願いしたいのは、何はともあれ、子どもたちが野球を心から楽しめる運営、指導に少しずつ変えてほしいということである。感受性豊かで、夢の多い小学生時代に、スポーツの楽しさを実感できた子どものなかからは、スポーツを心から愛する子どもが多

く輩出される。子どもは好きなことに対しては、自分たちでうまくする方法を考えるようになり、更に、それぞれの高みや夢に向かって挑戦するようになる。小学生の野球には「楽しさ」が必須の条件である。

－大人が勝敗にこだわるのは

やめてもらえないだろうか－

残念ながら、今の小学生の野球の運営、指導は「勝てるチーム」をつくるという大人たちの意向が強く反映されている。子どもたちが野球を「やっているのか」「やらされているのか」見れば見るほど怪しい。子どもたちを怒鳴る声の中からは、子どもが主役であるという謙虚さが感じられない。こうした練習風景からは、少なくとも自主性、創造性を育てる心遣いを見出すことは難しい。指導者や父兄は将来のプロ野球選手や甲子園球児を見据えて、本格的で厳しい指導の必要性を強調されるが、プロ野球選手や野球で生計を立てることができるのは圧倒的に少数である。感動ストーリーを作り出すメディアも、野球を取り巻いている大人たちも、球児の人生を背負い、責任をとるわけでもない。犠牲になるのはいつも子どもたちである。

スポーツである以上、勝ち負けはついて回る。勝つ喜びや負ける悔しさを味わうことも必要だが、まずはそのスポーツをするのも、見るのも大好きな子どもを増やすことではないだろうか。

問題解決には、社会風潮に飲み込まれない勇気ある指導者を一人でも多く増やすことが不可欠だが、未だに思うようになっていない。元高校球児としての力不足と不甲斐なさに忸怩たる思いを禁じ得ない。これからも未来ある夢多き子どもたちの「スポーツのあるべき姿」を求めて、更に主張し続けることになるだろう。